



猿沢の池の歌

明治時代の文豪・森鷗外（本名森林太郎）は、小説家、翻訳家、陸軍軍医（軍医総監）として明治中期から大正期にかけて活躍したことは、皆さまもご承知のとおりです。近代日本文学においては、夏目漱石と双璧を成し（代表作は『舞姫』『雁』『阿部一族』『高瀬舟』『山椒大夫』）、一方軍医としての鷗外は、11歳の若さで東京医学校予科入学、その後現在の東大医学部を19歳で卒業すると陸軍省へ就職しドイツ留学するなど、超エリートコースを進みます。（軍医としての組織の最高位も約束されたようなものでした。）しかし現実



は思い通りにはならず、突然、北九州の小倉に左遷とともれる異動が命じられました。（…鷗外が小説を発表していた出版社はすべて東京にあり、小倉への異動は作家活動の場を失うことになるのでは…）鷗外にとって、人生最大の挫折をどのように乗り越えたのか、何故立直って超人的な活躍ができたのか、NHK『英雄たちの選択』（森鷗外・37歳の転機 ～小倉“左遷”の真実～）は非常に興味深いものでした。（初回放送日：2023年1月11日）…結果的には、この小倉での体験が文学上の発展を遂げる人間的成長の引き金になったといわれています。鷗外37歳の転機は、何によりもたらされたのか？ …逆境から立ち直れた小倉滞在の時期、小倉在住のいろんな識者や町人・文化人との交流があり、特に、小倉の安国寺第27代住職・玉水俊麿（たまみずしゅんこ 1866～1915）からは唯識論（ゆいしきろん＝「自分」や「もの」への執着を捨てることで、他者との対立やお金、地位への執着から生じる苦から解放される…）の教えを受けたことで、“すべては自分の心次第”、境遇を受け入れよう！と決めたといわれます。…小倉への左遷は、「負け惜しみ」ではなく、心から「心身共に健（すこやか）」となれ、旺盛な作品を生み出し始める明治42年以降の、彼自身の作家としての人生の下地となった貴重な時期だった…と、番組はまとめていました。

ところで、番組でも紹介された“猿沢の池の歌”「手を打てば 鯉はえさと聞き 鳥は逃げ 女中は茶と聞く 猿沢の池」詠み人知らずの歌ですが、奈良興福寺にある猿沢池のほとりでの出来事を歌った唯識道（論）の有名な歌とか。…誰かが手を「パン、パン」と打つと、鯉はこれまでの習慣から餌がもらえるものと思い、岸边に寄ってくる。また、近くにいた鳥は鉄砲にも似たその音に驚き、飛び去ります。さらに近くにある旅館では、女中は客が自分を呼んでいるものと思い、大きな声で「はい」と返事をする。そのような情景が目

に浮かびそうですが、同じひとつの出来事・物事であってもそれを受け取るものの立場が違えば、とらえ方が異なることを示しています。相田みつをの『幸せはいつも自分の心が決める』…この分かりやすく簡単で、しかも仏教の神髄ともいえる究極の真理が詰まった名言と、軌を一にするものではないでしょうか。

いっしょに
あな
が
こころ
が
き
める

